

地尊心(ちそんしん)の解明・適用による人口減少社会への対応
(Applicative Researches of Community-Esteem for Decreasing Japanese Society)

ビジネス企画学科 畦地真太郎(産業情報研究所 所長)

AZECHI, Shintaro

縁あって岐阜の大学に着任してから、かれこれ 13 年になる。それまで岐阜には足を踏み入れたことがなく、せいぜい新幹線の車窓から見るソーラーアークと、関ヶ原の桃配山が印象に残っている程度。採用面接のために初めて降りた穂積駅は、特に印象のない関西郊外のベッドタウンを思わせる場所。採用が決まった後に電話した母は、前年に放送されていた NHK 連続ドラマの「さくら」の印象が強く、息子が山の中に転居するという強い勘違いを抱いていた。

他地域の人間にとって、岐阜はそれほど強いイメージを持たれている県ではないだろう。それでも「雪山、温泉、朴葉味噌」という、飛騨地方に対する漠然としたイメージはあるようだ。近年では、高山市の(特にインバウンド)観光が好調であり、北陸新幹線の開業によって世界遺産・白川郷への関心も高まっていると聞く。

一方で、他地域からの美濃地方のイメージは強いとは言えない。最近では、本美濃紙がユネスコ無形文化遺産登録に(2014 年)、清流長良川の鮎が FAO の世界農業遺産に(2015 年)登録されたこともあり、徐々にその文化的prestigeは向上しつつある。しかし、他地域からは岐阜県が「飛山濃水」の地であり、さらに飛騨・美濃内でもそれぞれに特色のある地域がひしめき合っている魅力的な場所であることは見えにくい。

岐阜県人、特に美濃地方の人間による、自地域に対するイメージも強いとは言えない。

このような断定は安易な地域ステレオタイプ化につながり、実際には西濃・岐阜・中濃・東濃(さらに南濃)において、あるいは各市町村や地域・人脈によって、自らの地域イメージに差があることは理解している。しかし、大域的に見たところ、岐阜の諸地域では自地域に対する理解と情報発信が少ないように感じられてならない。

筆者が研究フィールドとしている岩手県下閉伊郡岩泉町は、北上山地に位置する人口およそ 1 万人の町である。いわゆる中山間地域に属し、深刻な過疎化と高齢化、人口減少に悩む土地でもある。一方で、1980 年から 1994 年にかけて町民有志が「いわいずみ ふるさとノート」という地域研究誌を断続的に 12 巻発行し、そこから多くの同人が複数冊の単行本を発行したという経緯を持つ。その時代の町民自身による地域研究(歴史、民俗、伝承、自然地理、産業、詩歌など)の成果は、現在の人間が過去の地域の姿を知るための貴重な資料となっている。その地域性は現代にも残り、町の書店主が町民有志の(取材と執筆)協力を得て発行した地域情報誌「ら・ほん・て」

(2013-2014年)など、地域を知り続け、情報発信をし、後世に残そうという気概を持ち続けている。

この気概のことを“地尊心”と呼び、理論化し、この切り口から地域の活動と活力を解明しているというのが、執筆者の現在の主要な研究である。

岐阜県に話を戻したい。地域の有志が共同で地域に関する雑誌や書籍を刊行している場所が、岐阜県の中にどれくらいあるだろうか。市町村単位では、教育委員会や博物館などが努力をし、様々な情報発信を行っている自治体もある。また、美濃加茂市のように、外部の力を借りながら、地域と産業に関する情報発信にある程度成功している場所もある。

しかし岩手県では、上述の岩泉町だけではなく、多くの市町村で町民自らの地域研究と情報発信が行われている。盛岡市に複数の地域情報紙が存在するのは当然かもしれないが、内容は一般的なタウン誌、町歩き、伝統芸能等、多岐に渡っている。遠野市も歴史・文化的側面を強くアピールする観光地であるが、伝承と民俗芸能関連の地域研究誌を持っている。県内各市町村の書店あるいは道の駅などをのぞくと、必ずと言って良いほど、その地域の人の書いた(あるいはその地域に関する)書籍が販売されている。さらに、盛岡駅構内の地元書店には「岩手県関連書籍」のコーナーが存在し、岩手の今に関する多くの情報を入手することができる。「岩手には誇るべきもの、人、歴史がある」と岩手県民自身が思っているということは、これらの出版物を見るだけで、よく理解できる。

さて、岐阜県はどうだろうか？岐阜駅あるいは岐阜羽島駅で、岐阜県関連の書籍を多く入手することができるだろうか？いや、そもそも、そのようなものが発行されているのだろうか。

このことは「岐阜には岩手に比べて、誇るべきもの、人、歴史がない」ということを意味しない。岐阜県、特に美濃地方は、青野・大野・各務野の「三野」と呼ばれた古代から、大和朝廷の勢力下でありながら、一線を画す文化を築いていたと推定される。これは、昼飯大塚古墳を始めとする古墳群、南宮大社や元伊勢である伊久良河宮の存在など、多くの時代的遺物から推定することができる。中山道を始めとする新旧街道筋の交差地帯であり、さらには木曾三川を用いた大規模物流が行われていたことから、合戦場はもとより、特異な文化的資産も多い。県内各地には、地域の偉人を顕彰する記念館も多く、人材が払底しているわけではない。鮎菓子や栗きんとんに限らず独特な食べ物も多く、特に西濃では“みょうがぼち”と“みそぎ団子”に特に地域性を感じる。岐阜には誇れる文化は全て揃っている。

しかし、岐阜の人たちは、地域を誇ろうとしない。何故だろう。

岩手における宮沢賢治や新渡戸稲造がいないから？宮沢賢治が日本を代表する詩人の一人であり、岩手の風土に根ざした存在であることは全く否定しないが、それは岩手県民が賢治を“発見”し称揚し続けた成果でもある。よく知られていることだが、生前の賢治は童話集と詩集をそれぞれ1冊ずつ出版したにすぎない、ほとんど無名の存在であった。今日の岩手を代表する賢治のイメージを創り上げたのは、賢治を誇りに思い続ける岩手県民の継続的な努力によるものである。

岐阜にも、地域のイメージを代表する人物や文化やものは存在するはずである。それは円空で

あるかもしれないし、名和靖であるかもしれない。しかし、それらのイメージを誇るために、絶対に不可欠な条件がある。

岐阜の人々が、自分の地域の歴史・文化・人物・産業...その他もろもろのことをよく知ることである。そして知り続けようとする不断の努力をすることである。知ったことをそれぞれが継続的に、他地域の人たちに向けて情報発信していくことである。

そして、そのための気概である“地尊心”を強く持つことである。

自尊心(自尊感情)とは、日常生活では高慢なプライドと考えられることが多いが、心理学における用法は少し異なる。自尊心(Self-Esteem)の高い人物は、自分の価値を信じている者と規定され、それ故に他者と比較して自分の価値を捉えない。自分の良い点と悪い点を深く見つめて受け入れることができ、他者にもその自分を開示できる。よって、自尊心の高い人物は、他者と深く長い関係性を築くことができ、互いに理解し合うことができると考えられている。

地域にも同じことが言えるのではないだろうかというのが、地尊心の考え方である。

人口減少社会が強く言葉に上る現代の日本において、「選ばれる地域」となることが非常に重要になっている。この言葉は、ともすれば他地域から集住人口を分捕ってくるというゼロサムゲームの意味合いを感じてしまうのだが、これからの日本社会に本当に必要とされているのは、そこではない。地域の本当の姿を誇りを持って他地域の人たちに見てもらい、逆に他地域の本当の姿を見ることで、長期的な交流と相互理解を行っていかなければならないということである。それにより、ある者は現在の居住地域に残るだろうし、ある者は移住定住してくるかもしれない。しかし、多くの人がその地域の本当の姿を知ることにより、地域の“ファン”になってくれる可能性は高くなる。より多くのファンに選ばれた地域は、例えば定住人口の減る時が来たとしても(圧倒的多数の自治体には、その時は必ずやってくる)、地域の文化や歴史、何がその地域の誇りを作り出していたのかということ、人を通じて必ず残っていくはずである。

逆の例を考えよう。今「選ばれなければならない」という強迫観念に囚われ、例えば地域とは全く関係の無いイベントやグルメ、町おこしやハコモノ作りを行う自治体があったとしよう。それは、現在の地域住民の誇りに根ざさない活動である。さらに言うと、住民が自分たちの地域の本当の姿を知ることから遠ざかっていく活動になるだろう。地域の文化や歴史と分離したイベントが一時の集客を得たとしても、それは必ず相互理解からは離れていく。なぜなら、本当の自分の姿を隠し、上辺だけを取り繕い、愛想良く振る舞う人物(そして本当の自分を見つめ直すことのない人物)を理解することは難しいために、結局は人が離れていってしまうと同様、地域についてもその場限りのイベントの呈示が、その地域に対する理解を難しくしてしまうからである。

人の自尊心と地域の地尊心の関係が本当に成立しているのか、研究として実証するのはこれからの段階である。しかし、理論的あるいは実践的に考えて、自分の地域のことをよく知っていくことこそが、地域活性化と他地域との相互理解につながるという考え方は、的外れだとは思われないし、行って損のある考え方ではないはずである。

地尊心を考え、高め、選ばれる地域となるためには、まずは地域内の物事を拾っていくことが必要である。あまりにも日常的すぎたり、平凡であったり、「こんなものが」と思うような文化や物事が、他地域から見ると非常に優れたもの、より深く知りたいものであることは非常に多い。まずは身の周りの「ちょっと良いこと」「なんとなく好きなこと」を探していくことが、地尊心を高めていく第一歩である。もし、それを見つけられたのなら、それがいつから、なぜ存在し、どうして当たり前に見えるのかを紐解いていく。その知識を地域内でお互いに教え合うことこそが、地域内の地尊心を高めるだけでなく、他の地域から見て「自分たちをよく知っており、誇り高い、良い地域だ」と“選ばれる”、ひとつの切っ掛けになっていくものと思われる。